

宮崎縣佐土原町仲間原の海成洪積層

竹 山 俊 雄

宮崎縣兒湯郡高鍋町から佐土原町に亙る地域には大塚學士が高鍋層群及び妻層群と呼ばれた新第三系が發達し、之等を不整合に被覆する淡水成の洪積層がある。此の洪積層を大塚學士は通山濱層と呼ばれた。通山濱層は礫・砂・粘土より成り、流木以外には化石は未だ發見されて居ない。此の地方には海成段丘を被覆して居る薄い海成礫層は在るが、未だ化石を含んだ海成洪積層の存在は知られて居なかつた。筆者は昭和七年一月佐土原町仲間原ちゅうげんはらの南方の小徑に面した一小崖に半淡半鹹水棲の貝化石テュワンガールを含んだ含細礫泥層を發見した。此の泥層を仲間原層と命名する。仲間原層の化石貝類は次の二十四種である。

1. *Barbatia* (*Fossularia*) *yokoyamai* Takeyama
2. *Ostrea denselamellosa* Lischke

3. *Ostrea* (*Crassostrea*) *gigas* Thunberg
4. *Chama aspersa* Reeve
5. *Cardita cunningiana* Dunker
6. *Dosinia* sp.
7. *Saxidomus purpuratus* Sowerby
8. *Gastrium divaricatum* (Gmelin)
9. *Paphia* sp.
10. *(Mits) trus* (Linne) *beccarii*
11. *Semele* sp.
12. *Theora lubrica* Gould
13. *Mya* sp.
14. *Barnea fragilis* Sowerby
15. *Tegula* (*Chlorostoma*) *rustica* (Gmelin)
16. *Xymene? birillei* (Lischke)
17. *Gourmya* (*Contunax*) *kobelti* (Dunker)
18. "*Cerithium*" sp.
19. *Batillaria multiformis* (Dunker)

20. *Leminita imbricata* (Dunker)
21. *Thais luteostoma* (Dyhlwin)
22. *Thais cravigera* (Kister)
23. *Nassarius balteatus* (Lischke)
24. *Mitrella varians* (Dunker)

その外蘇蟲類の化石を少數含んで居る。

此の含化石層は大塚學士の妻層の泥岩を不整合に被覆して居る。Barnea が不整合下の泥岩の内に穿孔した爲化石に成つて居る状態は神奈川県橋樹郡旭村上末吉や大塚學士が記述せられた同縣同郡日吉驛近傍に於ける状態とよく似て居て上下の地層の間に不整合が存在する事を示す好例である。

此の化石貝類の内種迄同定し得たものは凡て現生種であり且之等は現在日向近海に棲息して居る。従つて此の化石表のみを見れば極めて新しい時代を示す様にも思はれる。併し乍ら此の仲間原層の堆積状態は通山濱層の堆積状態と酷似して居り、層序上共に段丘礫層と第三紀層の間に挟まつて居る。従つて通山濱層と仲間原層

を對比し、後者を前者の半淡半鹹水相と認められる。

紀伊半島沿岸から志摩、渥美、遠江に分布する海成洪積層のフオーナは可成りの絶滅種を含んで居る。併し乍ら之等の所謂絶滅種が大部分微小な貝類であり、その極く一部分の外は將來本邦近海に生存して居る事が明になるであらう。此の事は從來の經驗から充分期待し得る。横山博士が上部武藏野層の化石貝類を研究せられた際多數の微小貝類が現在生存する事を知られて居なかつた。併し當時博士が豫想せられた如くその後その多くが現在生存する事が明かに成つた。従つて所謂絶滅種を含まない仲間原層を前記諸地方の洪積層と同時代と見做す事は決して無理ではない。大塚學士は通山濱層を紀伊佐濱等の洪積層に對比された。筆者は此の考へを現在の智識を以てしては最も合理的なものと信ずる。

通山濱層堆積當時には高鍋町附近は少くとも

現在の海岸線以西は陸地であり、此の陸地上の河沼に堆積したのが淡水相の通山濱層である。然るに此の時には佐土原附近に西へ灣入した入江が存在し、此の入江の河口附近に半淡水相の

仲間原層が沈積した。換言すれば當時此の附近の海岸線は決して現在見らるゝ如き單調な直線的なものではなく、相當屈曲を有して居た。

(完)

京都府相樂郡笠置村産電氣石に就いて

鷄川平八郎

關西本線の沿線笠置村の東方は、雲母片岩を貫いて岩床を爲す片狀黑雲母花崗岩より成り、此の花崗岩は副成分として風信子礦及び柘榴石を含有し、前者は粒狀の微晶であつて黑雲母に包裹せられ強い多色性を示し、後者は紅色を呈し肉眼を以つて容易に其の存在を認め得られる。此處に記載する電氣石は笠置驛より約二軒柳生に至る道路の近傍に於ける日本石材株式會社の花崗岩採石所に産するものである。

電氣石は母岩中に幅約二厘内外の層となつて其の結晶が排列され、此の層に沿ひ岩石を破る時は第一圖の如くである。母岩の狀態に依つて Pegmatite 及び Aplite より産するもの、二様が見られる。

(1) Pegmatite に産するもの

雲母片岩との接觸部に於ては花崗岩は Pegmatite に移化し、黄鐵礦を多く含むで居る。此の部分に於ける電氣石は (2) に較べて結晶も大きい、龜裂に沿つて網目の如く黄鐵礦に浸